偽りの許嫁でも、本当の許嫁になれるよね？

白鷺　夜行

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

碧山　才人（あおやま　さいと）は一人の姉、碧山　希菜子（あおやま　きなこ）と同居している。

そして幼馴染の新井川　緑葉（にいかわ　りょくは）

才人は友人として緑葉と付き合っているが、緑葉は才人にぞっこんであった。

ある日、そんな２人が許嫁に!?

戸惑う才人。戸惑うふりして内心ガッツポーズな緑葉。

しかしこの許嫁の関係は仕組まれたものであり、ある目的を果たすためだけのものだった。

そして才人にはある秘密が・・・。

いつもの日常は急展開を迎える！

目　次

保健室マスター才人　。病院に運ばれる。 ―― 1
姉と父の暗躍（暗躍と書いてお節介と読む。） ―― 4
病院で大声を出すのはマナー違反。 ―― 8
ありきたりな約束だけれど。 ―― 12
暗く閉ざされた過去 ―― 18
さほど変わらない日常。 ―― 23

保健室マスター才人　。病院に運ばれる。

何気無い日常。そうか・・・
「幸せはここにあった・・・・・。」
ちょうど良く日が照る窓際。
周りは驚くほど静かだ。
そう・・・ここが・・・ここそが、楽園だっ・・・！
周りを気にせず俺は自分を貫く。そう決めたのだ。
例え雨が降ろうとはや○さ2が落ちて来ようが知るか！
それが俺の信ね・・・
「よし先生が起こしてあげようか？」
おいおい起こすつもりないだろ。
なんでシャイニ○グフィンガーしようとしてんだよ。
「まて、話せば分かります。人間は話しあいが・・・」
「古文の授業開始5分で寝はじめたのは誰だ？
永遠に眠らせたろか？いや、それじゃ面白くないな。
よし、ではお前の成績を5から3に」
「すいませんでした。成績下げるのだけは勘弁して
下さい。」
俺の信念はすぐ白旗をあげたのだった。
（しばらくして・・・）
「イラッシャイ。」
「何だその棒読み。ホントに保健の先生かよ？」
「ごめんごめん。はい、いつもの。」
ゴトッ
「・・・何、俺、死ぬの？」
いつものじゃない。
いつものというのは救急箱であり、こんな毒みたいな色した液体で
はなかったはずだ。
ここから考えられる結論としては・・・。
「そうか・・・パラレルワールドに迷い込んでしまっていたのか。」

「残念ながら違うよ。」
なん・・・だと・・・!?
「じゃあ何だよコレ!所持していい物なのか!?」
「もっもちろん。」
・・・怪しいな。
「言い訳は聞くよ。正直に話すならね。これは何だ。」
「・・・風邪薬かな・・・。」
「何目そらしてんだ。こっち見て言え下さい。」
「分かった言えばいいんでしょ。」
「実はねこれ・・・私専用の自分で調合した花粉症の薬なんだ。」
「これ飲むのか・・・市販薬でいいんじゃないの。」
「それでは効果も効能も薄過ぎる。」
ゴクゴク
ホントに飲んだし・・・。この人大丈夫か?
ってまあ薬学を勉強（独学）らしいし・・・平気だろ。
「失礼しました。」
「また来てねー。」
「二度と来るかよ。」
「そのセリフも１５６９回目だね。」
「今回は本当だ。」
そして俺は廊下を踏みしめる。
そう、これは明日への一歩だ。
明日も平和な1日でありますように・・・。
ゴンッ!
頭に鈍い痛みが襲いかかる。
上の図書室から本が落ちてきたようだ。それも六法全書。
これ、やばいんじゃないか・・・?
その瞬間視界が下に落ち廊下が近づいてきた。
いや、俺が近づいているのか。
「才人!?しっかりして!」
抱き止めてくれたのか。やっぱ優しいな。

「大丈夫!?」
ああ。
「姉ちゃん。」
「良かった・・・。本当に手がかかる弟だね。」
おやすみ。
そこで意識は途絶えた。

姉と父の暗躍（暗躍と書いてお節介と読む。）

「いや～疲れたなー。」
図書委員も楽じゃあないなぁ。
さて、またアイツは保健室にいるんだろうしなるはやで行かないと。
『キャーーッ！』
ドサドサドサッ！
（ん？本が落ちたのか。）
（はやくアイツと帰りたいけど・・・。）
「大丈夫？」

「遅くなっちゃったな。」
（アイツの家にでも行って一緒にゲームしよ。）
（それにしても六法全書どこいったんだろ・・・。）
ドンッ！
「「あっごめんなさ・・・」」
「あら、新井川ちゃん。こんばんワニー。」
「きっ希菜子先生？こっこんばんは・・・。」
「あれっそれって才人・・・ゴホン。碧山君の服じゃないですか。何かあったんですか？」
「別に呼び捨てにしていいのに。」ニヤニヤ
「茶化さないでもらえませんか！」
「いや。ごめんごめん。顔赤くしてるのも可愛いなーって。」
「かわ・・・いい・・・？」
「うん。」
「ななっ何言ってんですか！はやく質問に答えて下さい！」
「実は検査入院・・・」
「検査入院っ!?」
「どっどどどどこにいるんです!?」
「ちょっ落ち着いて・・・！」

落ち着けるかー!!愛する人が入院なんて聞いて落ち着いていられるかー!!
「ごめんね。これは事実なんだ。」
そんな・・・入院なんて・・・やだよう・・・独りぼっちにしないでよお・・・!
「やだっ。死んじゃやだよう・・・。」
「失いたくないかい?」
「うん・・・。」
スッ。
「!!これって・・・!」
「病院までの地図。」
「でっでも・・・」
「あなたは弟とその安っぽいプライド、どっちが大事なの?」
「あなたの顔みたらきっと元気になるから。」
「でっでも僕避けられてないんでしょうか・・・。最近遊んでくれないし・・・。」
「大丈夫だよ。なぜならね・・・」
昨晩
『いやー聞いてよ。最近緑葉が俺を避けてる気がするんだ。好きなヤツでもできたのかなー?でも
彼氏できても遊んではほしいなー。・・・それはマズイかな?流石に。』
「ってね・・・。避けてるのは才人じゃなくてあなたなんじゃない?」
「!!それは・・・。」
赤くした顔を見られたくなかったから。
いつも冷静な自分が、こんなだと知られたくなかったから。
恥ずかしかったんだ・・・僕。
僕がこんなんだから・・・才人にいつも迷惑ばかりかけちゃうんだ。
でも、今こそ恩を返す時!
「僕っ・・・。行きます。才人のところに!」
「そう・・・。ありがとう。じゃあ服もお願いね。」

「行かないん・・・ですか・・・？」
「まっまあね。いっ忙しいから～色々ね!?そっそろそろ行かなくちゃ!!」
「あの!!」
「・・・ありがとうございました！」
クルッ。
「・・・弟を、よろしくね？」
「はい！」
そう言って僕は涙を堪えながら走りだした。
待ってて、今、行くから・・・！

「・・・そろそろ出てきても大丈夫か？」
「うん。もう行っちゃった。」
「やっぱ嘘つくのヘタなヤツだなぁお前は。」
「うるさい！保健の先生に嘘は必要ないの！」
「ふー！これで少しはあの娘も素直になってくれるかな？」
「ああ。バッチリだ！よくやってくれたな、後はまかせろ。作戦は考えてある。」
「頼んだよ。油断しないでね。」
「ああ。分かっている。」
これであの二人の友達という曖昧な関係も・・・！
「チェックメイトや！」
私と父はそれぞれの役目を今終えようとしていた。
私は家のドアを開け・・・。
「あっ！いい忘れてたが、俺達の暗躍はあの二人が許嫁になっても続けるからな！」
（ん？いい忘れ・・・？）
・・・。
・・・？
・・・!!

「あーーー!!緑葉ちゃんに才人が軽い脳震盪だっていい忘れてたーーー!!」
「どっどうしよう!父さん!?」
「いや・・・むしろこれは・・・願ったり叶ったりだ。耳貸せ。」
ゴニョゴニョ
「えっ!それって・・・!」
「高確率でその展開になると考えている。そうなれば話もはやい。楽しみだな。うちの自慢の息子がどんな反応するか!」

病院で大声を出すのはマナー違反。

「どういうことだ・・・？」

なんで・・・なんでだ・・・・？

なぜ緑葉が俺のベッドで寝てるんだ!?

まあ落ち着け。こんなの落ち着いて考えれば分かる話だ。

俺病院に運ばれる。

←

姉が来て一緒にお医者さんの話を聞く。

←

しばらく安静にしていろ。

←

寝る

←

今現在。

・・・。

ダメだ・・・何も分からん！

緑葉はなぜここに？

すると俺の視界にあるものが映った。

「俺の・・・服・・・か？」

最近学生服で1日を過ごしてるから自分の服も分からなくなってきたな。

「ん、うううっ。」

「起きたか。って寝癖ひどいな。直してやるよ。」

ナデナデ

「ふみゅ・・・。」

今日は寝起きが良くて助かった。

いつもなら・・・。

『死ね！変態！』

とか言って、チタンコーティング製スコップ（税別４５００円）を振り回すが

今日は大丈夫なようだ。
いや～やれば親切にできるじゃありゃせんか緑葉さん！えらいえらい。
「・・・なんで僕の頭撫でてんの。」
「寝癖ひどいから直してた。それだけ。」
「そっか・・・。」
（喜んで損したよ。）
「それより大丈夫なの？」
「ああ。軽い脳震盪だ。全然平気だよ。」
「バカ・・・。」
「いきなり何だよ。」
「心配させんな・・・。」
「お前もしかして・・・。」
「泣い、てんのか？」
「・・・。」
ああダメだなあ僕。才人の前では泣かないって決めて来たのに・・・。
「泣いてないよ。全然。」
「緑葉。」
「・・・うん。」
「ごめんな。」
「ッ・・・！」
「僕、そろそろ・・・。」
「待て。最後に1つだけいいか？」
「我慢、なんてすんなよ。」
「別にしてないから。」
「泣けなんて言わない。」
「でもな・・・。」
「我慢はすんな。約束だ。」
「お前はいつも自分以外を優先する。それは別に悪くはない。」
「それで周りはいいが、お前はそれで幸せなのか？」

「だから・・・。」
「それ以上言わないで!!」
無理だ・・・!今更甘えるなんてできない!
だって・・・毎日僕はキミを馬鹿にして、無視して、キズつけてるんだよ・・・?
「甘える資格なんて無いよ・・・。僕には。」
「資格って必ず必要なのか?」
「必要だよ!」
「僕はそれを持っていない・・・。だから、」
「お前は俺の友達だ。」
「それだけでいいんじゃないのか?」
「俺はお前の友達じゃなかったのか?」
私の中で何かが崩れ、溢れ始めた。
止めようと思ってもこれは・・・
止められない。
本能的に悟った。
もう、ダメだ。
「・・・思った。」
「え?」
「一生会えないかと思った!!」
「僕っ、心配で、自分のせいじゃないかって・・・!」
「いつも上から目線で、嘘つきで、自分勝手で、僕は、僕は・・・!」
こんな素直になれない自分が・・・大嫌いだ・・・。
こんな事をしてきた僕を許してくれるわけないのにな・・・僕は何自分勝手な事言ってるんだろう?
彼は僕に失望するだろうな。
「・・・。」
もう、覚悟はできてるよ。何を言われても文句は言えないんだから、素直に受け止めよう。
例えそれが絶交だとしても・・・。さあ!どんここい!
「そっか。」

「え・・・?絶交とか、怒ったりとかしないの・・・?」
「しねえよ。ほら、他に何か無いのか?」
「えっと、あの、」
その後彼は僕の謝罪を僕の頭を優しく撫でながら聞いてくれた。
こんな最低な僕の話をまっすぐ目を見ながら。
そして彼は最後に優しく、ただ一言。
「よく、頑張ったな。緑葉は嘘つきなんかじゃない。」
「俺の知るなかで一番の正直者だよ。」
これでまた泣いてしまった。
これで何回目かな?
「ありがとうな。お前の素直な気持ちが聞けて嬉しいよ。」
「泣かせないでっ!」
「えぇ・・・。」
「明日は学校行けるからな。」
「大丈夫・・・?」
「ああ。」
「じゃあそろそろ帰るよ。」
「あっ緑葉!」
「?」
「その、ありがとな!」
「う、うん。じゃ。」
「じゃあな~。」
帰り道今日を振り替えって恥ずかしくなった。
でも・・・
「やっぱ大好きだ・・・!!」
そう、再認識させれた。

ありきたりな約束だけれど。

「起きろ！」
　俺の眠りを妨げる者は誰だ！
「僕だ。」
「お前か。てか心を読むな。」
「朝ごはんの時間だよ。」
「おう。いつもサンキュな。」
「・・・ちなみに毎度聞くけどお姉さんは・・・？」
「もちろん寝てる。」
「失礼な、起きてるよ。」
「なん・・・だと・・・！」
「失礼だと思わない!?」
「じゃあ行って来るよ。姉ちゃん。」
「また保健室で会うでしょ。」
「そうだけど・・・ほら俺ってさ、」
「それ以上言わなくていい。もう分かってる。」
「ほら、早く行った行った。」
「何か冷たくない？」
「今日は快晴だよ。」
「違う、そうじゃない。」
「随分時間かかったね。」
「怒った？」
「怒った。ていうわけで、これ。」
「弁当・・・？つまりこれは・・・！」
「そう、そうだ！」
（僕なりに頑張って作った君だけの弁当だ！）
（中身が色々アレな罰ゲーム弁当だ！）
「おっおう。気持ちだけ頂く！」
「遠慮しないで食べてね。」
「そんじゃ！」

「断りきれんかった・・・・！」
（でもまあ・・・・。）
「食べるか・・・・」
そして、数学、理科、国語、英語の時間全てを睡眠に費やした才人に試練が！
次回！才人死す！
デュエ〇スタンバイ！
「何だ夢か。・・・・。」
オマエハサイゴニコロストヤクソクシタナ。
ソッソウダタイサッ、タスケテ・・・・！
アレハウソダ。
ウワァァァァァァァァァァ!!
「ハァハァ・・・・！何なんださっきから！」
「どうしたんだ？」
「山田か！助けてくれ！さっきから変な夢ばっかりみるんだ!!」
「山田・・・？」
違う、コイツは山田じゃない・・・・！
「一体誰なんだあんた！俺と一緒に戦ってくれヴェ！」
「何すんだよ！」
「・・・俺に質問するな・・・・。」
「ナジェダ！ナジェダ!!」
ガバッ！
「おっおい、大丈夫か!?」
「やっ山田か？」
「おう。お前めっちゃうなされてたぞ。」
「心配事があるとよく悪夢をみるらしいが、何かあったか？」
「ありありだ・・・今何時・・・・」
才人は恐怖した。時計の針が示す時間は１２時２５分。すなわち、
「昼だっ・・・!!」
急いでこの学校から脱出しなければ・・・・！
彼の生存本能が警報を鳴らす。

「山田。」
「どうした？」
「俺は逃げることにした。今日は帰る！じゃあな!!」
「本当に何があったおまえぇぇぇぇぇぇ!!」
すまん。山田、俺には・・・
「やるべき事がある！」
俺は家に駆け込んだ。

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
どうしよう！才人に弁当渡しちゃった!!
だっ大丈夫！おかずは好きなもの入れたし、愛もこもってるはず!!
ていうか、
「何で素直に渡せなかったのかな・・・。」
やっぱり好き・・・だから？
「食べてくれるかな・・・？」
心配してばっかりだなぁ僕。
でも、才人は優しいから・・・
「大丈夫だよね。」
頬が緩む。
こんな所誰にも見せられないな。
「あのー新井川さん、」
「ん、何か用？」
「ううん、なんでもない！」
また行っちゃった。
ずっとそうだ。
手伝い位出来るのに。
やっぱり浮いてるのかな、僕。
ん？才人あんなに走ってどこ行くんだろう？

「胃薬よし!!」
よし、緑葉の弁当・・・いざ実食！

「普通に旨かったな。」
いや、まだだ！後から来る毒かもしれん!!
3時間後
「何も起こんねぇ・・・。」
マズイな・・・緑葉に失礼だったな。
この前あんな偉そうな事言ったのに・・・
「恥ずいな、俺。」
ピンポン！ピンポン！
「!?」
恐らくは・・・
「緑葉か・・・。」
しかし・・・
恥ずかしくて会わせる顔がない！
でも・・・!!
出るしかないか・・・。

どうしよう！まさか僕の弁当のせいで・・・!?
また才人に迷惑を・・・！

やっと着いた・・・！
「ねぇ！大丈夫！才人！」
インターフォンを連打！打つべし打つべし！
ガチャ！
「お、お前学校どうしたんだ！」
「・・・早退した。」
「別に来なくても良かったのに。お前は成績が、」
「ごめん」
「何で謝るんだ。」
「だって、だって僕の、僕の弁当のせいでしょ？」
「本当に迷惑ばっかりかけて、ごめん！」

「・・・俺も謝らなくちゃいけない事がある。」
「実は早退したの、お前の弁当が怖かったからなんだ！」
「・・・へ？」
「罰ゲームで渡されたから、下剤位入ってるんだろうなっていう推測で早退した。」
「ごめん。」
「じゃあやっぱり僕のせいだよ、渡したかが悪かったから・・・。」
「そうじゃない。俺が悪いんだ。」
「いや、僕が！」
　１０分後
「本当にごめんな。」
「ううん。こっちこそ。」
「弁当渡すなら普通に渡してくれよ。」
「いらないって言わない？」
「大歓迎だ。美味しい弁当が毎日食えるんだから。」
「～～～!!じゃあね!!」
「いきなり過ぎないか!?」
　明日弁当はどんな感じだろうな。
「明日の弁当も楽しみにしてるぞ!!」
　すると緑葉は止まって振り返り、
「ありがと！」
　あれ？
「緑葉お前笑って・・・。」
「笑ってないから!!」
「おっおい！気をつけろよ！」
　アイツの笑った顔、何年ぶりかな。懐かしい・・・
・・・懐かしい？
　そういえばアイツ笑った事なんてあったけ？
　あれ、思い出せない・・・!?何も分からない!?
　家族と過ごした思い出、アイツと遊んだこと、そしてアイツとの約束・・・。

約束・・・。
約束・・・？
・・・なんだっけ？
思い出さなくちゃいけない。そんな気がした。
その時、
「!?」
「頭が・・・痛てぇ・・・!?」
今にも頭が割れそうだ!!
何なんだ!?
何なんだよ!!
邪魔すんな・・・。
・・・。
あっ・・・
いし・・・きが・・・・とお・・・・く・・・。

『おおきくなったら＝＝＝＝しようね！』
『うん！やくそく！』
『ゆびきりげんまん、うそついたら、はりせんぼんのーます！』
『『ゆーびきった!!』』

ある電話ＢＯＸ
「希菜子、才人が倒れた。という訳で明日実行する。場所はあの病院の病室だ。」
「ついにやるんだね。」
「うん、また明日。」ガチャ。
「緑葉ちゃんは知ったらがっかりするだろうね。」
「才人が2年前以降の記憶がないなんて知ったら。」
「ごめんね緑葉ちゃん。」
「才人の記憶を戻すのを手伝ってね。」
私は人知れず公園のベンチに腰掛けボロボロ泣いた。

暗く閉ざされた過去

俺は笑顔が綺麗だったそうだ。
今はそんなことはないんだが・・・。
俺は何で記憶を失ってしまったんだろう？
昔何が・・・？・・・・頭が痛くなってきた。
薬飲まなくちゃな。
・・・この薬なんの薬なんだろうな？
まあ、いいか。

「やめて！やめてよ！」
何で？何で母さんは僕を殴るの？
何で・・・何で・・・
母さんは笑ってるの・・・？
姉さんはケガしてるし、父さんは泣いてるのに・・・
何で？
父さんが不倫？してないよ！するわけないよ!!
何でなの？
母さんは父さんを愛してるんじゃなかったの？
何で・・・！何で・・・!!
えっ・・・包丁・・・？
スパッ!!
姉さんの腕に大きな傷が刻まれた。
まさか・・・嘘だよね。
僕の母さんはそんなことしない・・・しないんだ。
・・・そっか。
コイツは、母さんじゃないんだ。
母さんはコイツに殺されちゃったんだ。
待ってて、母さん。今・・・
「仇をとるよ。」
あっ丁度カッターナイフがあった！よし、コイツで・・・

あれ、父さん、何で止めるの？
父さんは母さんを殺されたから泣いてたんでしょう？
邪魔しないでよ。
父さんの指を切る。
痛そう。でも僕は悪くないよ？
僕は正義のために、これからも平和に暮らす為にコイツを殺すんだから。
姉さんまで邪魔するの？
ああ、何なんだ。皆僕の邪魔をしたいの？
これは皆の為なのに。
・・・？なに震えてんの、オマエ。
母さん殺しといて何が許してくれだ。
願いを聞く？
そうだなぁじゃあ、
「死ね」
カッターナイフを胸に突き刺す。
「才人・・・。殺してくれて、あり、がとう。」
ドサッ。
呆気なかったな。つまんないの。
・・・・。
・・・・・・・。
・・・？
えっ・・・・・・・・・・・。母・・・・さん？
えっ何で僕は母さんを？
何で？
何で？
何で？
なんで？
ナンデ？
ナンデ？
ナンデ？

ナンデ？
ナンデ？
ナンデ？
「さっ才人？」
「とっ父さん・・・？」
「良かった・・・お前が無事で。本当に良かった!!」
「・・・？才人・・・？お前どうし」
「あああああああ！ああああああ！ああああ!!ああああああ!!!」
胸が苦しい！やめろ！やめろ！僕を僕を、
「俺を苦しめるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
「落ち着け！才人!!誰もお前を傷つけない！」
「嘘だ！嘘だ！」
その日、一人の人間が死に、一人の人間が壊れた。
3週間後
「記憶・・・喪失？」
「はい、息子さんはここ3週間以前の記憶をもっていません。」
「そっそんな！」
「しかし全て忘れているわけではなく、思い出を失っているのでこれから思い出をつくってあげて
下さい。」
「・・・さん！」
「父さん!!」
「ああ、どうした？才人。」
「腹減った。」
「呑気なやつだな！」

現在
もう、2年前か・・・。
「んっ・・・親父？」
「ああ。大丈夫か？」
「うん。俺なら大丈夫。」

「この薬を飲むんだ。」
「うん、ありがと。」
本当は記憶抑制剤なんて飲ませたくないんが・・・。
情けない・・・。
「失礼します。」
「ああ、緑葉ちゃん。急にすまないね。才人も聞いてくれ。大事な話がある。」
「二人に許嫁になってほしい。」
「許嫁になれ？俺は別に良いけど。」
「さっ才人君が良いなら・・・。」
「ありがとう。これから頑張ってくれ。」

「失礼しました。」
「じゃあな才人。安静にしてろよ。」
「うん、緑葉。また学校で。あと親父もありがとう。」

「緑葉ちゃん。少しいいかな？」
「？はっはい。」
「これから話す事は真実だ。」
「俺のせいで才人は母親を殺し、才人は狂って二重人格になってしまった。」
「今は、薬を飲ませて出ないようにしているが、いつかあの時みたいに、」
「狂うかもしれない。」
「だから、才人を任せたい。これは、君にしかできない事なんだ。」
「僕にしか・・・できない？」
緑葉ちゃん、本当にすまない。
しかしそれでも、
「才人には幸せになってほしいんだ。だから・・・！」
「分かりました。任せて下さい。」
ああ、そうだ。昔才人もこんな笑顔だった。

「薬だ。才人が苦しそうな時に飲ませてくれ。」
「分かりました。」
「じゃあ、頼んだよ。」
「はい！任せて下さい。」
才人。幸せにな。
そして、仕事に戻った。
才人には君が必要だよ。緑葉ちゃん。

さほど変わらない日常。

「はい、コーヒー。」
「おっ！サンキュー。」
　優雅な朝だ。目覚めもよく、それに加えて・・・
「どうしたの・・・？こっちジーっと見て。何か付いてる？」
「ああ、お前の後ろにお化けがな。」
「ヒギャアアアアアアア!!」
　そう、
「こんなおもしろい同居人ができるとはなw」
「笑ってないでどうにかしてよぉぉぉぉぉぉ!!」
「残念だったな。トリックだよ☆」

「・・・。」イライラ
「あっあのー？」
「・・・。」プイッ
（まずいな。またやり過ぎたか。）
「ごめん。本当に悪かった。許して！一生のお願い!!」
「・・・。」
「おーい。聞いてた？」
「プッ」
「アハハハハハッ!!」
「え。」
「こっこれは・・・？」
（そっそうか！遂に気が狂ってしまったのか！）
「えっと・・・クークルクークルっと。」
　困った時はクークル検索。これに限る。
　えっと・・・。お！ヒットしたぞ。
　何々・・・相手を驚かす。
　・・・いや、それで今俺の許嫁（仮）は腹を抱えて床を転げまくっているんだが。

うーむ。こんなときは・・・。
山田だ！あいつに聞いてみよう!!
『もしもし。』
『山田！聞いてくれ!!』
『おっおう・・・。朝から元気だな。』
カクカクシカジカ
『へー。大変だな。』
『くすぐり、頭ペシペシ、ゆさぶり攻撃。効かないぞ！』
『山田どうすれば・・・！』
『よし、あれを使おう！』
『必殺　現実逃避　じゃあな!!』
ブチ。
「俺を一人にしないでくれぇぇぇぇぇ!!山田ぁぁぁぁぁぁ!!」
そして考え抜いた結果、俺は
「・・・しばらくほっとくか。」
考えるのを止めた。
苦いコーヒーは飲めない俺だが、この日だけは飲めた。
「ほ～ら美味しい昼ごはんができたぞお嬢様。」
「食べる～～!!」
「いただきます。」
「あーん」
「しねぇよ。」
「あーーん!!」
「だーーめ。」
「一生のお願いっ！」
「あいよ。」
「～～～～!!」ジタバタ
「落ち着けい。」
いつからこいつは甘えん坊将軍になったんだ？
「幸せぇ・・・。」
「そうですか。」

「こんなだらしない顔しやがって！毎日みせろや！この甘えん坊将軍様め!!」
「満足じゃ満足じゃ～～。」
「俺が満足じゃないんだよ。」
「早くいつも通りになれ。」
「・・・ごめんなさい。」
「怒ってない。ただ・・・」
「その無理してる感じが好きじゃない。それだけだ。」
「言わせんな恥ずかし。」
「・・・ありがとう。」
「別に何もしてないが。」
「僕の事、ずっと見てくれていて、ありがとう。」
「すごく嬉しいよ・・・。」
「？おっおう。」
「ねぇ。ずっとそばにいて？」
「できる限りはな。」
「寂しいこと言わないで。」
「軽はずみな発言はしない主義だ。」
「変なの。」
「お互い様だな。」
「明日どうする？」
「このままが良いな。」
「明日は学校だぞ。」
「Ｏｈ・・・。」
こんな風に何も変わらない。俺たちが同居し始めたぐらいで。